瑞典王立図書館の漢籍について

大　澤　顯　浩

はじめに

先般、学習院大学の内外研修の制度を利用して 2002 年 4 月から 9 月にかけて、中国の明清時期の出版文化史の研究のためストックホルムの Östasiatiska Museet 東洋博物館に客員研究員として滞在する機会を得た。同博物館は中国音韻学で著名な Bernhard Karlgren ベルンハルド・カールグレン（高本漢）が館長を務めていたことで知られるが、今回は同博物館の Östasiatiska Biblioteket 遠東図書館にある漢籍を中心に調査を行った。

同図書館は、1879（明治十二）年に初めて北東航路を開いて日本を訪れたスウェーデンの地理学者、探検家 Adolf Erik Nordenskiöld アドルフ・エリック・ノルデンショルド（1832–1901）が 1879 年に日本で収集したコレクションによって夙に知られており、そのノルデンショルド・コレクションに関しては既にプリンストン大学の Sören Edgren ソレン・エドグレン氏による目録が存在している。[1] 同コレクションは他に反町茂雄『日本の古典籍』（八木書店、1984）「日本の古典籍の在外秘宝」の中で簡単に紹介されている（272 頁）。ノルデンショルドの航海については、日本ではあまり注目されなかったが、近年彼の航海記 *The Voyage of the Vega Round Asia and Europe* の翻訳が出版され、[2] 日本でも関心がたかまり、1999 年 5 月には横浜でシンポジウムが開催された。最近その報告書もストックホルムで刊行されている。[3] また軌を同じくして、『国際交流における地理学的探検の意義―A. E. ノルデンショルドの偉業と日本語文献の国際的評価―』（同研究会、2000、同第二版、2002）が、中央大学の徳永英二氏を代表とする同研究会の成果として刊行されている。

またこの他に、遠東図書館の特色あるコレクションとしては、1940 年から 45 年にかけて Gunnar Martin グンナール・マッティンが北京で収集した美術書・建築書のコレクション 282 種がある。その中には『崇陵等工程做法圖様』や『圓明園内工則例』といった檔案類も存在し、同博物館年報に同じエドグレン編纂の目録がある。[4] さらに、カールグレンの高足 Göran Malmqvist ヨーラン・マルムクィヴィスト（馬悦然）教授が四川の旧家から買い求めた蔵書約 1800 部（簡単な書名リストが図書館に存在する）、ヴェトナムのフランス税関に勤めていたスウェーデン人官吏の子孫が 1982 年前後に寄贈した一群の越南書約 50 部（未整理）があるが、いずれも未だ充分に活用されているとは言い難い状況にある。

また和書では、明治 40 年から 43 年にかけての雑誌や官報、さらには『大蔵省年報』、『文部省年報』、『京都帝國大學一覧』のような官庁の発行した種々の刊行物も多数存在する。雑誌で目についたところでは、『太陽』や『日本及日本人』、『女學世界』、『演藝畫報』、『文藝倶樂部』のような題名があったが、ここでは和書については触れないので、別に専家による調査研究を期待したい。

王立図書館寄託の漢籍

今回調査した漢籍はもともと Kungliga Biblioteket 王立図書館に収められていたものであるが、1985 年に遠東図書館が王宮対岸の小島 Skeppsholmen シェップスホルメンの現在の場所に移転し、翌年の 1986 年に王立図書館から寄託された和書、漢籍が遠東図書館の特別書庫内に移されて現在に到っている。その一部に関しては『令嬢ジュリー』などで知られる作家の August Strindberg アウグスト・ストリンドベリィが王立図書館の書記官として勤務していた 1878 年頃に作成したカタログが王立図書館に残されている。[5]

また、ストリンドベリィの目録作成の後に収蔵されたものについては、ある時期に分類が試みられ鉛筆で分類の記号が記されている。これらの王立図書館寄託の漢籍についてはカードが作成されてはいるが、そのカードも未分類のままで、明末の版から民国に到るまでの雑多な書籍がほとんど研究の対象とされずに収められている。

これらの内容を概観すると以下のような特徴がみられる。A～K の記号を持つものは、聖書や一部の書帖を除くと概ね木版のもので、時期的には 1870 年代光緒初期までのものである。E, F には欠番となって見当たらないものも存在するが、一部満州語のものなどは遠東図書館には移されなかったという。これらの書籍を一瞥すれば、広州や佛山の書肆の名が多く見られ、主として広東を中心にして集められたといえる。それに対し M の記号を持つものは大半が 19 世紀末から 20 世紀初めの排印本で上海や漢口の出版物が多い。

また、これらの収集された時期を考える手がかりとして、収集の時期を直接反映していると考えられる時憲書や通書、縉紳便覧などをみると、年紀を持つものはほぼ特定の時期に集中している。また、極めて多くの版を重ねている聖書もほぼ出版と同時期に収集されたと考えてよいだろう。以上を手がかりにして、A～K の記号を持つものに関しておおよその時期区分を試みると以下のように分けられるだろう。

a） 乾隆前期
乾隆十三年から十七年にかけての時憲書：1748～1752
乾隆二十五年時憲書：1760

b） 嘉慶中期
嘉慶九年時憲書：1804

c） 道光末～咸豊初
陰隲文図説、道光二十八年：1848
咸豊三年通書：1853
咸豊五年六年、旧約全書、新約全書：1855～56

d） 同治前期
同治三年～五年、旧約全書、新約全書：1864～1866

e） 光緒初期
光緒二年、光緒五年縉紳便覧：1876、1879
光緒四年京報：1878

a)・b)の乾隆前期・嘉慶中期はスウェーデン東インド会社の活動による時期であり、c） の咸豊以降の開港された時期とは活動の主体が異なるかもしれな

い。スウェーデン東インド会社は 1731 年に設立され、オクトロイという貿易許可を得て Göteborg イェテボリを拠点として活動した。オクトロイは三回更新されたが、四回めのオクトロイ（1786〜1806）の時に中国の政治情勢が難しくなり、また茶や陶器の輸入品の需要も減少したため損失を出して 1806 年に倒産した。その後四度目の更新時に 1813 年までの許可を受けたが結局船は送られなかったという。[6)]

e）の時期はストリンドベリィが目録を編纂した時期である。ストリンドベリィ自身は 1878 年に Uppsala ウプサラ大学図書館の漢籍の目録を編纂したが、1882 年には王立図書館の職を辞している。[7)] 光緒四、五年（1878〜79）というと彼が図書館で仕事をした時期と重なり、ノルデンショルドの Vega ヴェガ號が北東航路周航を成し遂げた時期でもあった。蔵書の中には光緒四年刊の『康熙字典撮要』（G1b）のようにノルデンショルド自身がもたらしたものも含まれている。

これらの漢籍は収蔵された時期もまちまちで、その性格も簡単にまとめることはできないが、概ね以下のように分類できると思われる。

1） Drottningholms slott ドロットニングホルム宮殿図書室の記号が附されているもの。プロシアのフリードリヒ大王の姉で、スウェーデンの啓蒙専制君主グスタフ三世（在位 1771–92）の母后 Lovisa Ulrika ロヴィーサ・ウルリカ（1720–82）のコレクションの一部であった。上の区分では a）・b）の乾隆前期・嘉慶中期以前のものにあたる。スウェーデン東インド会社の活動期間であるが、遠東図書館のラルス・フレデリクソン館長によると漢籍自体はアムステルダムから買い取られた例もあったらしい。コレクションのなかでは最も旧いもので革の装丁のものが数部あるほか、別に小さな紙片を書籍の肩に貼っただけものや、番号をペンで記しただけのものもある。

C1b–⑵　本草綱目　Bencao gangmu　洋装一冊　巻首及び図巻を合訂、（Strindberg 40）HISTOIRE NATURE EN CHINOIS（背表紙）、「Drottningholms Bibl.Kat125」

雍正十三年重鐫、「三樂斎蔵書」朱文方印（封面）（1735）

D1-⑴　芥子園画伝 Jieziyuan huazhuan 五巻 洋装一冊 （Strindberg 33）CHINES:TEKNINGAR（背表紙）、「Drottningholms Bibl.Kat 126」 康熙十八年：李漁序 （1679）、芥子園鐫蔵（題簽）

以上のような革装のものは王室の人々が賞玩したものと思われ、背表紙に翻訳されたタイトルが付けられている。本草書や美術書の類であるがいずれも挿図があり、眼を楽しませるものである。『本草綱目』図巻には金山 Kom Siang〔広東語音の転写か〕, Guld（金、スウェーデン語）、珊瑚 Sian Vou, corall, 琉璃 Nau Li、貓 Mao, Katt（猫、スウェーデン語）、海鹽 Kaj Iem というように漢字音やスウェーデン語を注記されたものや（C1b）、彩色を施されたもの（C1c）もある。他にも洋装になっていないものも若干あり、

J3-6　大清嘉慶九年歳次甲子時憲書 Shixian shu 洋装一冊 「DRB Ⅱ-42」（1804）

J14　三字経 Sanzijing 一冊七葉 「D.R.B Ⅱ-41」（Strindberg 5）

などの例を見ると、十九世紀初頭までの書物は概ねドロットニングホルム宮殿のライブラリィに収められたと考えてよいようである。

2） その後上記の 1） とあわせて、A～K の分類記号が附されているもの 102 部。光緒初期までのもので、現在の分類から見ると概ね以下のような分類がなされたようである。A 総記、B 儒教経典、C 本草、D 芸術、E 歴史、F 宗教、G 言語、H 詩集、I 小説・戯曲、J 占術暦法、K 京報、ただし、各分類の内容は筆者が便宜的に付したものである。これらの分類はおおまかなもので、中には薛仁貴を主人公とする講史小説の『異説後唐傳三集薛丁山征西樊梨花全傳』Xue Dingshan Zhengxi fanlihua quanzhuan 十巻九十回（残二冊巻一・二及巻九・十）[8] が E13 歴史に分類されたりする点、またいずれも実用書という共通点はあるものの、縉紳便覧が時憲書や通書と同じ J に含められるなどやや妥当を欠く点もある。

B6c　春秋 Chunqiu 三十巻八冊
芥子園重訂監本春秋、乾隆庚戌年新鐫（封面）（五十五年、1790）

E1　注釋古周禮 Gu Zhouli 六巻三冊 （Strindberg 15）
明郎兆玉注釈、天啓丙寅（弁言）（六年、1626）,「堂策檻」（版心）

J6　夏季廣東大小文武官員縉紳 Guangdong daxiao wenwu guanyuan Jinshen　二冊　光緒五年刻（1879）第八甫載経堂板

J7　乾隆十六年象吉金水全備大書 Xiangji jinshui quanbei dashu　一冊　紅表紙、応世堂（1751）

I4a　天花蔵批評平山冷燕、Ping shan leng yan
新刻天花蔵批評玉嬌梨 Yu jiao li 四巻二十回　四冊（Strindberg 6）
荑秋散人編次、封面「天花蔵七才子書」、雍正庚戌退思堂重刊（八年）

この中の多くはストリンドベリィの作成した目録にも記載されている。その目録には上記のドロットニングホルム宮殿のものも含め、監本五経からフランスの Rémusat レミュザがパリで復刻した『玉嬌梨』までの 41 部が記されている。[8] そのほとんどは現在ストリンドベリィの手跡になるペン書きのタイトルのコピーが貼られた紙箱に収められて保管されているが、一部所在不明のものも存在する。1877 年 3 月から、ストリンドベリィは中国語を精力的に学び始め、ストックホルムとイェテボリの漢籍目録を作成したが、[9]『察世俗』や『新遺詔書』のようにおそらくストリンドベリィ以前から存在していたと思われるものが収められていないこともあり、1882 年の辞任当時存在したすべての漢籍を網羅したかどうかについてはなお不明な点がある。

3）M の記号が附されたもの。一部番号に欠があるとはいえ D（double の意か）の記号も含めると 89 部になる。ストリンドベリィ以後の 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて在華の宣教師などから送られたものではないかと思われる。なかには 100 年ほど前にひもを掛けてスウェーデン語の紙片を附した状態のままのものもある。洋装本も存在するが、大部分は線装本である。キリスト教関係の書籍がかなり多く、さらに小学校の各種の教科書や『三字経』や『神童詩』の類の童蒙書のテキストなどもみられる。大半が光緒半ば以降のキリスト教関係の排印本であるが、その中で木版のものは概ね『三字経』や『百家姓』のような童蒙のもので、キリスト教関係で木版のものは、比較的早い光緒前期のものに限られる。聖書公会 British & Foreign Bible Society の出版した各種の聖書や漢口の英漢書館、聖教書局、上海の美華書館の出版物も多くみられる。漢口には当時、プロテスタント系のミッションの拠点 Central China Relig-

ious Tract Society が存在していたようであり、所蔵される同会の年報 *"Light in the East* 東方既明" 1905 年度と 1906 年度版によれば、スウェーデン・ミッションの牧師 Rev. John　Skold や Rev.S.M.Freden もその理事に名を連ねている。なお以上のような清末のキリスト教文献に関しては、吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』（汲古書院、1997）が有用である。

M1b　時務三字經 Shiwu Sanzijing　線装一冊　光緒癸卯梓（1903）

M2　最新中國歴史教科書　Zhongguo　lishi　jiaokeshu　四巻　線装二冊　排印本　臨安姚祖義編纂、上海商務印書館、光緒三十二年　（1906）

M36　耶穌聖教婚喪礼 Yesu shengjiao hunsang li　洋装一冊　排印本　光緒二十五年（1899), 漢口聖教書局印発、漢口英漢書局鉛板印、口語

M53a　頌主聖詩　附聖教類聯 Songzhu shengshi　洋装一冊　排印本　光緒二十年序、光緒二十六年（1900)、漢口聖教書局印発、漢鎮英漢書館鉛板印

4）Litt.Kines というような分類項目が立てられたもの 45 部。それには数字の番号のみのものも含めてよいと思われる。洋装本が多く、欧文の学術書や論文の抜き刷りも含まれる。漢籍はほとんど民国に入ってからのもので、中央研究院の刊行物が多く見られる。

Litt.Kines X45/134　売油郎独占花魁　洋装一冊、書學博士施理漁答著訳　Gustave Schlegel, *Mai-yu-lang-toutchen-hoa-kouei*, Leyde, E. J. Brill, 1877, 光緒丁丑年重鐫、大荷蘭國莱担城聚珍印（光緒三年）

Litt Kines X49/675　新唯識論 Xin Weishilun　線装四冊、排印本　熊十力著、民国三十六年「十力叢書」

Litt.Kines　*Lehrsaal des Mittelreiches*　中國學堂、洋装一冊　Carl Friederich Neumann, Munchen, 1836　三字経、常清静経の複印

5）分類記号の全くないもの、漢籍も含まれるが書帖や告示、版木、絵図、新聞、ある種の書類が存在する。珍しいものでは耶穌會士蘇若望述「天主聖教約言」や湯若望訳著「天主正道解畧」（辛丑孟夏武林昭事堂刻)、「論釋氏之非」（辛丑仲夏武林景教堂刻）といったイエズス会士の傳単五種、光緒八年の申報、滬

報、新報や、民国二年五月二十九日付けの新聞十二種などが紙箱に収められて保存されている。

＊無記号　仏説観世音菩薩救苦経 Guanshiyin pusa Jiukujing　附十六句観音経護身呪、諸難呪大寶楼閣根本呪（題簽）　折本一冊　黄絹表紙　黄絹函入、萬暦辛丑年当今皇帝発心印造（二十九年 1601）

＊無記号　「閑邪公家傳」拓本　書帖　折本一冊（Strindberg 26）
聊城周馳譔、呉興趙孟頫書

＊無記号　武昌警察総局示　光緒三十年　月　日

＊無記号　西秦月報 Xi Qin yuebao　西安省城内夏家什字福音堂　排印
第一年　第一号　光緒二十二年八月十五日　1896、第二号　光緒二十二年十月、第三号　光緒二十二年十一月　毎張價錢八文

＊無記号　書道練習字帖二種、半葉三行四字 「上大人孔夫子」、紅糸欄
「翁秀卿先生四時読書楽」安化黄自元書、烏糸欄

＊無記号　唐番新報、第 304 号　光緒八年六月初三日（1882 年 7 月 15 號）
Chinese News Paper, San Francisco

以上、王立図書館寄託の漢籍の性格について簡単に記したが、以下に所蔵漢籍の一斑を記号に従って紹介したい。

解題

A1　増訂大板萬寳全書 Daban Wanbao quanshu 十巻六冊（Strindberg 13）
康熙壬寅（61 年、1722）序刊、「書林龍文堂繍梓」（巻十巻末木記）
白口無魚尾四周単辺、上欄十三行十五字下欄十二行十七字、框高 19, 8

明末に発達した日用類書の一つ。封面には「諸名家合選/大萬寳全書/龍文堂梓行」とあり、また巻首の目録には「新刻四民便覧萬寳全書目録」と記している。さらに巻四のように「訂補大板萬寳全書」と記すものもあり、内題も一定していない。巻首の目録の版心では「大萬寳」とあるが、巻一の版心では「訂補全書」となっている部分もある。

巻頭に康熙壬寅冬拙忍主人識の「大萬寳全書序」をおき、目録、十八宿全図、

禹書経天合地図、五岳形図とつづく。本文は上下二層になっており、上層は十三行十五字、下層は十二行十七字。目録では三十五門に分類されており、天文、地理、人紀、国朝、時令、農桑、文翰、夷狄、画譜、博弈、字体、体式、勧諭、爵禄、茶経、酒令、算法、夢書、状式、通書、星平、風鑑、数命・笑話、種子、宅経、堪輿、卜筮、對聯、医学、祛病、養生、跌筈、馬牛、雑覧となっている。呉蕙芳『萬寶全書：明清時期的民間生活実録』（国立政治大学歴史学系、2001）は明末以来の日用類書の諸本 68 種を挙げて対照しているが、この龍文堂本のように分巻が十巻で 35 門となるものは見当たらない。ただし、序に「萬寶全書輯自煙水山人」というように分類の順序や内容から見ると大阪大学懐徳堂文庫所蔵の煙水山人序『敬堂訂補萬寶全書』34 巻、乾隆 11 年刊本が比較的近いものかもしれない。「新刻四民便覧萬寶全書目録」と目録にあるのはむやみに長い題名をつけた明末の風によるもので、結局、上記のような種々存在した明末清初の「萬寶全書」の版木の一つをもとに十巻に組みなおして康熙末年に龍文堂が梓行したものと思われる。元来江南で作られたものが広東に伝えられて、独自に改版されたと考えてよいだろう。本来は各門にあてられていた巻数を削除したようで、例えば、巻一の半ばに存在する地輿紀（目録には地理門とあるが本文では地輿紀となっている） には巻数がつけられないが、「新刻大板萬寶全書」と内題を残したように記している（二十葉表）。

巻一地輿紀では、盛京［古幽薊之地至明成祖纘承大統/建為北京今　大清建為盛京］というように北京を盛京と記している点、また巻末の貴州の末尾に呉三桂が設置した四郡を「呉王新開四郡名」として黔西府、咸寧府、大定府、平遠府の名を列挙している点が注目される。[11] また巻二、歴科状元には康熙庚戌科（九年、1670）蔡啓遵浙江人まで記されている。巻十、雑用門巻末の木記に「書林龍文堂繡梓」とあるが、Fuchs フックスによればワイマールに同じ「書林龍文堂繡梓」という木記のある版がある（Fuchs Nr.152）。巻九、卜筮門及び巻十、養生門の一冊が存し、框高 19, 8cm というのもほぼ一致するので同版と考えてよいだろう。[12]

A3　増補玉堂註釋雑字大全 Yutangzhushi Zazi daquan　二巻二冊　（Str-

indberg 16）　東園雑字大全（封面）

増補幼學須知雑字大全（下巻巻首）、乾隆間刊、白口単魚尾四周単辺、

上巻上図下文、下巻上欄十二行十四字、下段十二行二十字、框高 19, 1

明末以降発達した類書の一種である雑字の一つ。表紙はなく、紙縒りで綴じて封面を糊付けしたもので、第二冊も同様の封面を糊付けしているだけの装丁である。封面には横題に「居家必備」とあり「甲子春重鐫/東園雑字大全/寶翰楼校梓」とある。下巻、歴代帝王総紀には乾隆［元年丙辰萬萬年］とあり、乾隆九年（1744）の版刻であろう。封面にある寶翰楼とは明末の蘇州で活動した書肆であろうか、待考。呉蕙芳『萬寶全書』664 頁に挙げる乾隆 36 年刊の京都陽明文庫所蔵『増補萬寶全書』30 巻にも「寶翰楼梓」とあり、乾隆年間の活動が確認できる。

巻首に「読書人の図」を掲げ「十八宿全図」、中国全図（無題）を掲げる。ついで上下二層にわけて下層は「小児論」（孔子項橐故事）、百家姓郡望、九帰歌訣（掛け算の九九）、九因法歌訣となり、上層は孔子小児図、孔門弟子、先賢名士類、千字文、警世文、占灯花吉凶となっている。なお、先賢名士類には日記故事系の二十四孝が四字題を付して挙げられている。第十三葉から増補玉堂註釋雑字大全上巻となり、上層は天・雲・雪・雨・日・月……というような語を文字と図で表す三段四列の十二図が半葉に描かれ、下層は図に対応するように天文門以下の類書的な分類にしたがって語句を並べ簡単な注釈を加えている。

書名は内題が上巻と下巻で異なっており、封面「東園雑字大全」Dongyuan Zazi daquan、上巻「増補玉堂註釋雑字大全」、下巻「増補幼學須知雑字大全」Youxuexuzhi Zazi daquan と、ともに題が異なる。さらに、版心には上下巻とも「霞園廣集雑字」とある。「東園雑字」という書名ではパリの BNF フランス国立図書館に二点、[13] 嘉慶刊本（封面「粤省學院前/東園雑字大全/栄徳堂校梓」Courant No.7708）と、道光刊本（封面「禅山舎人後/東園雑字/街近文堂梓」Courant No.7709）があり、Dresden ドレスデン市内の Sächische Landes Bibliothek ザクセン州立図書館には清刊本の上巻のみが（封面「禅山福禄里/東園雑字/翰選樓發客（ママ）」Eb430c, Fuchs Nr. 146, p80）所蔵される。いずれも広州や佛山の書坊の出版で、欧州の各地にもたらされたことが分かる。[14]

C2a　圖像本草蒙筌 Bencao mengquan　十二巻巻首一巻　革装一冊（Strindberg 27）　陳嘉謨纂、「帯月楼蔵板」、
白口単魚尾四周単辺、十二行二十六字、框高 21, 4

原本は嘉靖間の陳嘉謨の編纂になる本草書で、崇禎初に劉孔敦の補訂により図が補われた。陳嘉謨は廬陵の人で嘉靖丁未進士。[15] 劉孔敦は医書の刊行でも知られる福建建陽の書坊喬山堂の劉龍田の子であり、清初にも活動を続けていたようである。[16] 四冊が洋装本一冊に仕立て直されて革で精美に装丁され、背表紙に GAMLA CHINESISKA MADICIN と記され、「Drottningholms Bibl. Kat123」という分類番号を付けられている。封面には「増補圖像本草蒙筌備要」、「帯月楼蔵板」とある。[17] 王重民の記す崇禎間万巻楼周如泉刊本 [18]（『中国善本書提要』258 頁）と同じ版式で十二行二十六字であるが、万巻楼崇禎刻本にある嘉靖 44 年の陳嘉謨の自序と崇禎元年の劉孔敦序は削られ、

撮要本草蒙筌序：嘉靖乙丑（四十四年）許國序
重廣本草圖經序：元祐七年林希序

の二つの序がついているだけであり、熊宗立の成化丙申序は歴代名医姓氏に付けられたものである。また、ノルデンショルド・コレクションの中にも崇禎元年序刊本が一部存在する（Edgren No.1038）。それには、嘉靖の陳嘉謨自序と崇禎の劉孔敦重刻序、嘉靖の許国序がある。それに対し帯月楼本には重刻の原版には見られなかった宋代の林希序がついていることや、書肆の名前も崇禎刻本の万巻楼周如泉と異なっていることから、後に帯月楼が刊行しなおしたものと考えられる。題名も時代も異なる「重廣本草圖經序」が何のために付いているのかは不明だが、フックスの紹介する万巻楼詳較梓行本（Fuchs Nr.116）にも林希序が付いている。いわば宋代の序文が明末清初期の刊刻の盛んな時期に書物の由来を権威づけるために再利用されたということであろう。内閣文庫に崇禎元年序萬巻樓周如泉刊本（子 043-0010）を蔵するが、林希序はない。

C2b　本草蒙筌 Bencao mengquan　残三巻一冊、存巻六至巻八第二葉
新安陳嘉謨 Chen Jiamo 纂輯、万暦間刊
白口単魚尾四周単辺、十一行二十一字、框高 16, 8

新安陳嘉謨の編になる本草書で十二巻。王重民『中国善本書提要』（257 頁）の紹介する嘉靖刊本と同じ版式であるが、杜信孚『明代版刻綜録』（江蘇広陵古籍刻印社、1983）にあげる嘉靖四十四年陳嘉謨刊本は七巻本で九行二十字、白口、左右双辺となっており版式が異なる。巻六、菜部、巻七、菓部、巻八、石部が、堅い紙の表紙に革紐で綴じて洋装の一冊にしたててある。巻八は第二葉、瑪瑙、琅玕までしかない。末尾に「Nils Wesfman Stockholm 1760」という書込があり、乾隆年間にスウェーデンにもたらされたと思われる。内閣文庫に万暦元年周氏仁寿堂刊の十二巻総論一巻の完本（304-0295）が所蔵され、版式や第六巻第一葉の框高が同じなので、万暦元年刊本と考えてよいと思われる。

D2 a　閨門必覧 Guimen bilan（題簽）不分巻一冊　図五十二葉（Strindberg 9）雍正四年序刊本、
白口無魚尾四周単辺、框高 18, 2、「聚善堂蔵板」印記

題簽に「閨門必覧」とあり、内題はない。封面には「麟兒為記」として麒麟にのった童子の図が描かれる。序は朱で印刷されており、女性は閨門の奥深くで成長して庭の外に出ないので、この図譜を得て観れば何でもその姿を知悉することができ刺繍の手本とすることができるとする。全文は以下のとおり。

> 嘗謂女子之德有四、則婦德婦言婦容之外、而婦工又不可少焉者也。所以七夕乞巧於天孫、而針黹工夫、遂得稱為士女班頭矣。第女工之類甚繁、必立一譜以定其規程、而女子方不致嘆于無所藉手以成其業。是故大而天仙人物、小而花卉禽魚、奇而龍鳳亀麟、微而昆虫蛺蝶、女子生長深閨之中、不出戸庭之外、得是譜以觀之、而百物莫不洞悉其神彩、而呈形錦繡之上、則黼黻之英華、端有頼焉。

末尾の署名には雍正四年（1726）中秋望題于羊城歩青楼樵陽主人とあり、末に「聚善堂蔵板」白文方印がある。版心には「緑窓珍賞」とあり、魚尾は無いが飾りのついた文様がある。序以外には文は無く、花や昆虫、童子さらには芝居の一齣のような図柄や吉祥物といった様々な意匠の図がある。針仕事のデザイン集といったものであろう。

D2b　緑窓時藝 Lüchuang shiyi（封面）　不分巻洋装一冊　図六十葉（Strindberg 32）　清刊、「名花聚蔵板」封面、
白口無魚尾、天地双辺、框高 19, 9

題簽は無く、封面に「緑窓時藝/名花聚蔵板」とある。版心には魚尾はなく、上下に亀甲紋をうかべた巻物の図柄が彫られ、その中に「随花/遺編」、「名花聚/蔵板」と記されている。革装にしたてなおして、背表紙に CHINES MONSTER という欧文タイトルが付けられ、裏表紙には紋章がつけられている。裏見返しに「Drottningholms Bibl.Kat131」という書込があり、王宮でデザインを賞玩されたものであろう。鏡袱のための刺繍の文様といった用途別に意匠をあげたり、花や人物、福や壽といった吉祥の文字をデザイン化した意匠が収められている。書名から見ても上記の「閨門必覧」と同様の女性が参照するための書といえよう。第五十九葉に木記があり、

> 是刻也非圖微利而為。蓋吾友屢屢見求不已、啓匣與之。未幾彼竟付諸梨棗。余甚惶愧、雖然呈笑于大方、亦可枱（貽：筆者校）情于淑媛。識者鑒焉。

という。巻末の第六十葉に「不佞刻斯譜者由来久矣近因書坊魚龍混雑識者鑒諸」という告白がつけられていることから、初版ではなく何度か版を重ねたこと、同類の書物を書坊が濫造していたと思われ、女性向けの書物の需要がある程度存在していたことが想定できる。

E3　廿一史約編 Nianyishi yuebian　存六冊　（Strindberg 23）
呉興鄭元慶芷畦述、康熙間刊、「萃華堂蔵板」
白口無魚尾四周単辺、九行二十一字、框高 18, 1

康熙年間に編纂された歴代正史の概要を記したダイジェスト版の歴史書で、当時まだ正史の完成していなかった明代・南明にまで及ぶ。著者の鄭元慶は浙江帰安の人で、字は子餘、芷畦は別字という。康熙四十一年（1702）に自著『石柱記箋釈』五巻[19]を出版しており、魚計亭は鄭元慶の室名である（瞿冕良『中国古籍版刻辞典』斉魯書社　1999、379 頁）。封面に「萃華堂蔵板」とあり、その上方には「郡伯陳瞿石先生鑒定」の横題がつく。さらに、

天地初分至崇禎甲申天文/地理君臣礼楽経籍食貨百/官万國兵制釈老無不具備という、三行の告白がある。この本は第五冊の唐代の部分（匏部）と第八冊の明代の部分である後編（木部）を欠くが、遠東図書館には四川の旧家から買い取った蔵書の中に別に魚計亭蔵板本一部を蔵す。萃華堂蔵板本には、

序：八閩鄭開極題

序：晋安友人陳一夔序

自序：丙子小春二十有五日（丙子：康熙 35 年、1696）、（鄭元慶自序）

後跋：愚表甥徐起麟謹識

という序跋が巻首に附されるが、第八冊を欠くため後記はない。東洋文庫に上洋江左書林藏板の康熙刊本（『東洋文庫所蔵漢籍分類目録　史部』第八、史鈔類、70 頁）があるほか、内閣文庫（『改訂内閣文庫漢籍分類目録』史部史鈔類 87 頁）及び BNF フランス国立図書館（Courant No.1385）に魚計亭蔵板本がある。内閣文庫本（史 75-5）は黄表紙の美本で「祕閣圖書之章」の朱文方印があり、巻末に「康熙歳次丁丑立夏呉興布衣鄭元慶載記」という康熙三十六年の後記と後跋（愚表甥徐起麟謹識）がある。BNF 本は、封面に「御覧」「金閶文秀/堂発兌」の朱印があり、巻末に康熙三十六年後記がある。康熙のそれほど長くない期間にいくつかの版を重ねていることから見て当時では比較的普及したものであったようだ。

例言に「明史尚未頒行、何敢漫為徴信、茲従吾學編・紀事本末等書、補輯後編、一切稗官野乗、概不攙雑」とあり、明代の部分（後編）の編纂には鄭暁『吾学編』や谷応泰『明史紀事本末』を基にしたことがわかる。総目巻頭には閩中陳瞿石先生鑒定　呉興鄭元慶芷畦述とある。陳瞿石とは序の晋安友人陳一夔のことで、その序の終わりに「瞿石」・「殉難忠臣之子」の印がある。[20)]

始めに上古以来の歴代国号や道統・輿地図・歴代方域・礼楽・食貨・官制・兵制・釈老等の図や注釈を載せ、次に正史の細目とその本紀・列傳の提要を記し歴史知識を簡便に身に付けさせるもので、科挙の歴史参考書といってよいだろう。「上遡太古、下迄勝朝、計一百三十有九篇、約而不遺、馴而可誦」と自序にいう。自序や後跋によると甲戌年に醵金されて刊刻を始め数か月かからず年を越して翌丙子年二月には完成をみたという。

E8　瀛環志畧 Yinghuan zhilüe　十巻、洋装一冊（Strindberg 38）
徐継畬著、道光戊申年鐫（封面）、「福省東街口宋鐘鳴刻字」
中黒口単魚尾左右双辺、十行二十五字断句標点、框高 26, 5

封面に「道光戊申年鐫」とあり、巻末には「福省東街口宋鐘鳴刻字」とあって福州で刊刻されたことが記され初版本とみられる。著者の徐継畬は山西五台の人、道光六年（1826）進士。福建布政使の任にあるときに編纂を始め、道光戊申（二十八年、1848）に完成した。初めに「地球圖」、「大清一統輿地全圖」とその説明を掲げ、次いでアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの各大洲各国の図及び説明を加えるという形の世界地誌である。以下の序跋がある。

瀛環志畧叙：道光己酉夏四月汶上年愚弟劉韻珂拝譔
序：道光二十八年、長洲愚弟彭蘊章拝譔
跋：道光戊申秋八月会稽陳慶偕謹跋
序：道光二十八年歳次戊申秋七月福山鹿澤長謹序

装丁の状態が『康熙字典撮要』（Gb1）とよく似ており、おそらく香港で一冊に製本されたもので、西欧人向けに装丁しなおされたことが推測される。日本・中国の各種目録によるかぎり初版本の存在はあまり知られないが、後に洋務運動が起こってから注目され、同治五（1866）年総理衙門によって重刻されて（丙寅本）同文舘の教科書として用いられた。当時としては類書の少ない世界地誌で、魏源『海國圖志』とともに広く利用された。[21] 日本では、東北大学に道光三十年刊本、同治十二年刊本、東洋文庫に同治五年刊本などが所蔵され、和刻本も多く作られている。フランスを佛郎西（巻七）、アメリカ合衆国を米利堅合衆國（巻九）と表記するなど、現代の普通話の地名表記とは異なる点に、却って当時の日本に与えた影響の大きさも窺える。台湾商務印書館の影印本（1986）があるが、最近、上海書店出版社から近代文献叢刊の一つとして同治癸酉（十二年、1873）刊本を底本とする排印本が出版された（2001）。

E12　至大重修宣和博古圖録 Xuanhe Bogu tulu　三十巻　三帙十五冊、王黼等撰　元刻明修本、
白口双魚尾対向、左右双辺、八行十七字、框高 29, 2（巻二第一葉表）

原本は北宋末に編纂された古銅器の図録。元刻本に一部、後印のものを配套したもののようである。刷りは不鮮明な部分もあり、版木の下部が数字分欠けていたり、大きな割れ目が入っていることもままある。巻二十五第一葉表の框高 29,4cm というのは王重民のいう元至大間刻本（『中国善本書提要』子部、譜録類、304 頁）のものに近い。さらに、紙の焼け具合や框高からみて、王重民が紹介する万暦間刻本ではなく、『北京図書館古籍善本書目』にみえる元刻明修本ではないかと思われる（史部、金石類、1089 頁）。陳寧や文玉・沈貴・桂孫・伯英などの刻工名が各処にある。王重民が元至大間刻本の記載で挙げる刻工「邵宗彦」は該当するところには見えないが、陳寧は磧砂蔵にも名の見える元至大年間の刻工であるという（瞿冕良『中国古籍版刻辞典』325 頁）。紙の質は元版のものより薄い感じがする。版心に「五」の文字が「X」のようになっている箇所がみられる。また、一部の図には鉛筆の書込があり、カールグレンの青銅器研究に用いられたものかもしれない。東洋文庫所蔵の元刻明修本（『東洋文庫所蔵漢籍分類目録　史部』金石類 461 頁、XI-2-23）がこの本によく似ているが、東洋文庫本には刻工名が無く、この本より後の時期のものであろう。

各冊第一葉に「仁壽山荘」（縦 4,6 横 2,1cm）の朱印があるが、文政四年（1821）に「仁壽山学問所」を設立した江戸後期の姫路藩家老河合道臣（かわいひろおみ）の蔵書印であるという（吉川弘文館『国史大辞典』巻三、693 頁）。[22] また、ノルデンショルド・コレクションの『硯譜』（Edgren No.1049）にも「仁壽山荘」朱印がある。いわば、姫路でともに収められた書物が明治時代に流出し、はるばるとストックホルムまで来て巡り合ったわけである。

F2　　舊約全書 Jiuyue Quanshu　三巻三冊　排印本（Strindberg 36）
　　咸豊伍年鐫、白口単魚尾四周単辺、十七行三十三字断句標点、
　　框高 16, 1、文言訳

封面は黄紙で「咸豊伍年鐫（1855）/舊約全書/香港英華書院印刷」とある。第一冊は創世記から路得記まで 141 葉、第二冊は撒母耳記上巻から詩篇まで 182 葉、第三冊は箴言から馬拉基書まで 147 葉。末尾に「舊約全書終」とある。

F3c　新遺詔書 Xinyizhaoshu 八巻　一帙八冊　「DRB.Ⅱ.48」
「耶穌降生一千八百一十三年鐫」（目録末）　白口単魚尾四周双辺、八行二十二字無界断句標点、框高 13, 1、文言訳。

題簽には「新遺詔書第一本」、黄紙の封面には「耶穌基利士督我/主救者新遺詔書」とあり、Robert Morrison ロバート・モリソン（馬禮遜）が 1813 年広東で出版したもののようである。蘇精『馬禮遜與中文印刷出版』（台湾学生書局、2000）に大英図書館蔵の小字本が紹介されている（41 頁）。説明には 1813 年木刻、線装四冊、白口双魚尾、四周双辺、七行二十二字としているが、巻頭の図片五に掲げられる小字本の「聖馬竇傳福音書巻一」巻首の写真をみると単魚尾八行二十二字でこの本と同一の版であることがわかる。

ストリンドベリィのイェテボリ博物館の漢籍カタログ八部の中には『新遺詔書』が見えるが、ストックホルムのカタログ四十一部の中には見えない。しかし、「DRB.Ⅱ.48」という分類番号があり、もともとはドロットニングホルム宮殿旧蔵のものと思われる。盾と二羽の鳥を描き「SPERAVI' INFESTIS」という文言を記した蔵書票が附されているが、同じ蔵書票が嘉慶九年の時憲書（J3-6）にもついている。

また、ドロットニングホルム宮殿旧蔵のものとは別に、無記号のものの中に第八冊、巻八　聖保羅與希比留輩書至聖若翰現示書が存在するほか、別置の未整理本の中に「kungl bibl」印のある別の一部の第一冊から第七冊までの七冊（016713～19）が存在しており、総計すると二部所蔵していたことになる。なお、『新約全書』や『新約聖書』と異なる『新遺詔書』という訳書名に関しては、後に太平天国で出版された聖書が同じく『旧遺詔書』『新遺詔書』というように呼ばれていたようであり、この系統の訳名が受け継がれたものといえる。[23)]

F12　舊約全書（擬題）残八巻、洋装一冊　倡領書紀巻七至綱鑑下書巻十四
白口単魚尾四周双辺、十四行三十三字断句標点、框高 21, 2、文言訳、清刊

旧約聖書の文言訳のものであるが、漢訳の篇名は現在の篇名と異なる。誰によるいつの翻訳かは現時点では不詳であり待考。ハードカバーの装丁で、背と

四隅は革が用いられ、裏表紙見返しに右上に「Litt Kines」同右下に「10665」という書込がある。分巻と葉数は以下の通り。

倡領書紀巻七、21 葉。
路得書記巻八、3 葉。
撒母耳紀上書巻九、28 葉。
撒母耳紀下書巻十、23 葉。
王紀上書巻十一、27 葉。
王紀下書巻十二、27 葉。
綱鑑上書巻十三、26 葉。
綱鑑下書巻十四、30 葉。

以下に倡領書紀（士師記）冒頭部の訳を示す。

倡領書紀巻七
　第一章
適約書亜崩後、以色列族問皇上帝、必當先代我前往、以攻迦南種類、孰乎皇上帝遂/曰猶大必前往、然我以是地已交與其手也。（以下略）

G1b　康熙字典撮要　Kangxi zidian cuoyao　不分巻　洋装一冊
英國湛約翰創著、南海王楊安述釈、光緒四年（封面）（1878）
白口単魚尾四周双辺、十三行十七字、框高 19,4

英国の湛約翰（John Chalmers）著、南海王楊安述釈になる字典、封面に「広東倫敦教会蔵板」とある。BNF にも所蔵される（Courant No.4620）。五百葉の大冊で、厚紙の表紙に背と四隅に黒革が用いられており、背には右から「康熙字典撮要」と金文字で押してあり、香港で洋装本に仕立てられたと思われる。巻頭の書法に、

一、本書将声母字千餘、皆依康熙字典部首派列標明、以便査検
一、本書数万字、皆当随声母、如釘従丁是也

などとあり、排列の方法に工夫をしたものらしい。各字の音は反切で表されるが全体の排列は韻母ではなく声母に依っているので、それまでの韻書と排列は大いに異なる。現代のアルファベットを用いて排列する方法の代わりに、数が

恐ろしく増加せざるを得ないが声母を用い、語頭の音ごとにグループにまとめようとしたものといえる。西欧人には従来の韻書のスタイルよりはアルファベット順のスタイルに近いものであったかもしれない。ノルウェーのオスロ大学の漢籍リスト Oslo University: older Chinese books[24] によるともう一本の『康熙字典撮要』の所蔵があり（HS380 ekspl.2), 同治壬申年新鐫の『青雲樓重訂監本春秋』（金陵芥子園李氏訂梓）（HS1490）の春秋地圖に J.Chalmers は遠方湛約翰繪として名があがり [Chalmers, John, 1825–99 ; Hummel p. 837] と注記されている。また、1859 年に香港で出版された『英粤字典』*An English and Cantonese Pocket-Dictionary* の編纂も手がけていたらしい。[25]

見返しには著者の J.Chalmers による一枚の英文の解説「Directions for the Use of the Concise Dictionary of Chinese」が附けられ、その冒頭に “Professor Nordenskjold with Author’s Compliments” との献辞が記されてあり、1879 年秋にノルデンショルドが香港に寄港した際に贈られたもののようである。

また、巻末に附された「康熙字典撮要改錯」とする正誤表には、「本字典茲減價毎部工料銀貳圓/己卯年又三月告白」とあり、「1st May 1879」から $3 から $2 に値下げするという告知が入っている。

G2　　華英通語 Hua Ying tongyu（封面）　不分巻二冊　木版
　　同治壬申重訂（1872）、白口単魚尾四周双辺、框高 15, 1

一種の商用英会話のテキストというべきもので、二冊で通計一百七十八葉。題簽は無く、封面に「華英通語」、「西営盤／恒茂蔵板」とあり、香港で出版されたものである。同じ版がオスロ大学にも所蔵される（HS407）。咸豊庚申（1860）の序があり、

　　余友　子芳、自少肄業於英人書塾、至今歴年久矣

とあり、英人の塾に学んだ子芳が商用のために作ったもののようである。封面には「同治壬申重訂」（11 年、1872）とあり、序にも訂正を重ねたことが記されているので、何度か版を重ねた後のものであることがわかる。本文中の例文には 1855 年という年紀が各処に見えるので、実際は後述のように別のものに

よって 1860 年以前に作られたもののようである。

序：咸豊庚申清明節拙山人謹誌

目録

（凡例）

楷書大字・楷書小字（活字体）

草書大字・草書小字（筆記体）

とあって数目類へと続く。

数目類以下は四十一類に分けて英語の語句や短文を漢語に対照させている。語句は半葉を二行四段の八つに区切り各一区画に一つの英語の語句が草書（筆記体）で記され、その上に漢語の意味、下に英語の発音が漢字で付けられている。ただし、「四/Four/科」というように広東語をうつした語音であり現代の普通話の語音ではない。例文の場合も半葉を五段に区切り、以下のように同様に漢語と英文、漢字（広東語音）を用いた英語の発音が下に注記される。

我　想　同　你　買　的　茶

I wish to buy some tea of you

挨 喊樹　滔 拝　心　咖 呵父 夭

（長句類、一百七十五葉裏）

你　毎月　有　幾多　工銀　呢

What wages do you get per month?

挖　為遮士　都　夭　吉　巴　吆扶

（長句類、一百七十六葉表）

というように記している。

福沢諭吉が『福翁自伝』にいう万延元年（1860）に出版した『増訂華英通語』[26] は、咸臨丸に乗って幕府の使節に随行してアメリカに渡ったとき、サンフランシスコ在住の清の商人から譲り受けた子卿原著の『華英通語』という中国語と英語の会話テキストにカタカナで日本語の「音訳」（発音）と「義訳」を加えたもので（同凡例）、英語の上下に日本語と広東語の発音、枠の右端に漢訳が移動されてさらに日本語訳が付けられている。底本とされた子卿原著『華英通語』は、咸豊乙卯（1855）の何紫庭序があり、咸豊庚申（1860）の序のある子芳の

編のものとは同名であるが内容は若干異なる。しかし、乙卯本の序の撰者何紫庭は巻末単格式の例文に見える何瑞記、陳紫庭の名前を組み合わせたものであり、その部分は庚申本とも共通している。両本は本質的には同じ『華英通語』であり、同治壬申重訂とあるように庚申序刊本は乙卯本の改訂版といってよいのではないか。さらに別の本には同じ咸豊庚申拙山人序のある「咸豊庚申重訂」とするものもあって、この本以前に別の版が存在していたこと、たびたび改訂が為されたことが推測される。[27] 福沢の『増訂華英通語』とこの重訂『華英通語』では広東語音による英語の発音表記に異なるものがあるが、それらは改訂を反映したものであるのかもしれない。いずれにせよ、19 世紀半ばに香港の出版物がアメリカ西海岸にまで渡り、福沢を経由して再び太平洋を横断して日本に渡ってきた事実には一つの感慨を覚えずにはいられない。

I11　新刻正原本第八才子花箋書 Huajian shu 四巻 二冊、（Strindberg 8） 清末刊、白口単魚尾四周単辺、十一行三十一字、框高 16, 2

木魚書と呼ばれる中国南方の広東語地域の民間説唱文学のテキストで、才子佳人を題材にした七言句の詞曲、清末刊。巻首に挿図が二図ある。封面題には「第八才子花箋」とあり、封面には「鍾映雪先生評」「省城學院前/丹桂堂蔵板」とある。『花箋』を研究対象としたものには梁培熾輯校標点『花箋記会校会評本』（暨南大学出版社、1998）があるが、従来知られていなかった版である。「道光二十年新刊」の文字は無いが、表紙の印象は梁培熾が 45 頁の書影に挙げるパリ BNF 所蔵の翰経堂版（Courant No.4112）に似ている。パリの翰経堂本では封面題「第八才子花箋」や「鍾映雪先生評」という字句の配置は同じで、「省城九曜坊/翰経堂蔵板」という書坊の記載が異なるだけである。両者の間になんらかの関係があったと考えてもよいだろう。また、オスロ大学の漢籍リストにパリ BNF 所蔵の Courant No.4110 と同じ『静浄齋第八才子書花箋記』が見える（HS4820）。早くに西欧に伝えられ 1824 年には英国の P. Thomas により *Chinese Courtship* という題でロンドンで英訳されているという。

K1　光緒四年京報 Jingbao　十二帙　木活字本、（1878）

正月　一帙二十冊、二月　一帙三十冊、三月　一帙二十九冊、
四月　一帙三十冊、五月　一帙二十九冊　六月　一帙三十冊、
七月　一帙二十九冊、八月　一帙二十九冊、九月　一帙三十冊
十月　一帙二十九冊、十一月　一帙三十冊、十二月　一帙二十三冊
聚恒報房、白口双魚尾対向四周双辺、七行十七字、框高 15, 7

京報とは勅令や上奏をまとめて発行されたもので、一種の官報にあたる。『中国大百科全書』新聞出版巻（1990）中国古代報紙、492 頁に説明があり写真も掲載されている（図版 1 頁）。また、斉如山「清末京報瑣談」（『斉如山随筆』中央文物供応社、1953）に詳しい。この本は元来、各冊の表紙に「京報」と朱印が押されているが、装丁し直されているので新たな表紙の裏側に透けて見える。退色して藤色のようになった罫線に木活字で七行十七字で印刷されているが、上三字分は抬頭のため空格になっている。版心には「京報」、「駐京塘務」とある。十二帙の一揃いに整えられている。正月分の第一冊には年度末の封印期間をはさむために前年 12 月 30 日から新年正月初三日までが一冊にまとめられている。京報は実際には『申報』などの新聞に数日遅れて抄録が附されていて、主な内容はそれらを対照することで知ることができる。最近、大陸で編纂された『邸報』（中華全国図書館文献縮微複製中心、2003）は光緒八年以降のものであり、一年間がまとまった形で収められているものとしてはこちらがより早い。なおザクセン州立図書館には同じ聚恒報房の咸豊十一年（1861）三月の京報四冊が所蔵される『京報』四冊（Ed430g）（Fuchs Nr.31）。

咸豊十一年三月初二日、十一・十二日、十三・十四日、十七・十八日

なお、遠東図書館には別に以下のような内容の紙片が残されており、装丁直しと帙製作の費用明細がわかる。参考のため下に附す。

代訂
光緒四年京報共三百三十八本
毎本〔訂工/切工/紙線〕銭七文共計銭二千三百六十六文
又代做書套十二個毎個〔布紙/做工/骨籤〕銭一百十五文共計銭一千三百八十文
両共實銭三千七百四十六文合洋三元四角〔洋価一千一百文〕

白大老爺〔電〕己卯〔又三月十六〕

Litt Kines　新鐫批評繡像玉嬌梨小傳　Yu Qiao Li 不到尾　一冊（Strindberg 41）

IU-KIAO-LI, Abel Rémusat, Lithographie de V.Ratier, Paris, 1829

白口単魚尾四周双辺、九行二十四字、框高 17, 3、断句圏点、頭注、

『玉嬌梨』は第三才子書とも称された四巻二十回の才子佳人小説。王立図書館には他に『新刻天花蔵批評玉嬌梨』（集文堂蔵板本 I3a）と『平山冷燕』と合刻された雍正庚戌退思堂重刊本（I4a）の二部がある。フランスの中国学の祖ともいうべきレミュザが 1829 年パリで復刻したもの。一冊のみで　第二回第十六葉までしかない。封面に「己丑年携」、「刻石堂蔵板」とあるが、これはレミュザがパリで復刻させた年代と石版画の工房を意味するのかもしれない。原本は BNF 所蔵の同じ題を掲げる『新鐫批評繡像玉嬌梨小傳』（Courant No.4014）と思われる。『玉嬌梨』は 1826 年にレミュザが *Ou Les deux Cousines* という題でフランス語訳をパリで刊行している。[28)]

No.333 *CHHÒNG-SÈ KÌ: The Book of Genesis; Amoy Vernacular*, Yokohama, (Revised Edition 337) 1900

ローマナイズされたアモイ語訳の創世記で第 337 版、The British and Foreign Bible Society 聖書公会によって横浜で出版されたもの。聖書の各方言の訳については、游汝傑「『聖経』方言訳本書目考録」（章開沅・馬敏主編『基督教与中国文化叢刊』第三輯、湖北教育出版社、2000）に詳しく、游汝傑が厦門土白の一つとして 108 頁に 1900 年刊、45 頁、修訂本として挙げるもの。

No.1090　明治十二年十月十三日付外國人入京免状

1879 年 10 月ノルデンショルドが神戸に入港した際に京都に遊覧に行った時の許可証で、内容は以下のようである。

第三八号

外國人入京免状

國籍　瑞典
姓名　ノルデンスチヨルド氏　Prof. Nordenskjold
身分　博士
居留番号/旅寓番号　神戸
旅行旨意　養生
入京道筋　大阪ヨリ順路京都府下及琵琶湖奈良
京都府下ハ山城國内ヲ限ル琵琶湖ハ東彦根
南ハ草津北ハ塩津竹生島ヲ限リ往復
入京期限　二十日間
右道筋日限ノ通入京差許候條無故障相通可申事
明治十二年十月十三日
兵庫県令森岡昌純　印

最後に「此免状ハ兵庫へ帰着ノ日ヨリ二日ノ内ニ縣廳へ返納スヘシ」との但し書きがあるが、ノルデンショルドは記念に持ち帰ったようだ。裏面には六か条からなる「入京外國人心得」が記されている。別に明治十二年の京阪神の汽車の時刻表（定価二銭）も保存されている。ノルデンショルドの京都・琵琶湖への周遊は同『ヴェガ号航海誌』第 18 章、西日本の旅（350 頁以降）に見える。10 月 11 日横浜を出港し 13 日に神戸着、神戸からは鉄道によって京都に行き、数日間各処を遊覧した後、18 日の朝神戸を出発し長崎に向かった。

また同様のドクトル、キリステルーソン（Kristersson? 上海在留瑞典那威領事）名義の明治十五年六月廿六日兵庫県令森岡昌純発行のものも存する。漢籍ではないがとくに留めて記載する。

＊無記号　察世俗、巻三（八月）一冊、第五十葉至第五十六葉
博愛者纂「諸國異神論」、白口単魚尾四周双辺、八行二十字断句、框高 13, 8、口語

表紙に「博愛者纂」「諸國異神論」とあり、William Milne ミルン（米憐）がマラッカで創刊した最初の中国文の雑誌『察世俗毎月統記傳』の零本一部である。博愛者とはミルンの筆名。版心に「察世俗」「異神論」「巻三」とあり冒頭

第一行に「諸國之異神論」、「八月」とある。『察世俗』は 1815 年から 1822 年にかけて刊行されたがミルンが死去したことにより停刊。蘇精「近代第一種中文雑誌：察世俗毎月統記傳」[29] に詳しい。

＊無記号　*The cause of the Riots in the Yangtse Valley*: a “Complete Picture Gallery” Hankow, 1891, 高 27.7cm, 寛 35.5cm, 32 図

「謹遵聖諭辟邪全圖」という題をもつ清末の教案の反キリスト教宣伝の伝単三十二図に英語で翻訳と註釋をつけたもの。紅緑黄青などの多色の木版画で「鬼拝猪精圖」や「豚羊雑種圖」などがある。ロシアのアレクセーエフの収集した年画に同じものがあり、リフチンによって紹介されている。[30]これは、未整理のところに別置されていたので、あるいは王立図書館の蔵本とは異なる由来をもつかもしれない。参考に附して著録する。

結語

在外の漢籍を通観することは、個別に注文することもあった江戸時代の大名家のような特殊な例外を除けば、基本的には当時の商人が店頭で手に入れやすかったものが集められたと考えてよいだろう。例えば、ノルデンショルド・コレクションでは、今日では知りえない明治十二年の書店や書物の実態が価格も含めて直接保存されていることも評価されている。

王立図書館のコレクションを通観して感じることは、まず全体の部数に比して通俗的な書物が比較的多く残されていることである。もちろんそこにはある種のバイアスが存在したであろう。革装の精美なものは美術的な関心からもたらされたものと考えてよいだろうし、『本草綱目』が複数部あったのは、そのスウェーデン語の書き込みなどからみてもリンネの植物分類学との関係を推察させる。また、宣教師がもたらしたと想定される 20 世紀初頭の小学校の教科書なども意図的に収集したようで、かなりの量がまとまって存在する。

翻って、版本をみれば『古周禮』（E1）など明末の版がいくつか見られるほかは、清代以降のものが大部分をしめ大抵が清末のまさしくありふれたもので、まさに俗書の世界が広がっている。西洋の商人が善本をありがたがって買うは

ずも無いので宋版などあるべくも無いが、乾隆年間にも明版は海外にも売られていく程度には流通していたらしいことも『本草蒙筌』残本（C2b）の 1760 年の記載のある書き込みによって推測できる。

しかし、小説や俗曲に比して別集類が少なく杜甫と李白しかないのも、やはり唐詩という雅なものに対する需要がそもそも中国の店頭自体で少なかったことを推測させる。正史などきちんとした歴史書も当然のように見られず、『廿一史約編』という俗なダイジェスト版くらいしか見当たらない。それに対して通書や占術書、宗教的小冊子（善書として無償で頒布されたものか）などは大きな割合を占めているといってよい。例えば、道光以降の通書には『日記故事』系の「二十四孝」が収められているが、乾隆時代の通書にはまだ「二十四孝」は入れられていないことなども、このような俗書を時系列的に比較して初めて知られることであり、中国では意外にわからないことだろう。

そして、この俗書の世界では、乾隆十六年の通書『象吉金水全備大書』（J7）が各省の図の中で南方の四省の図「広東・広西・雲南・貴州形勝圖」だけを置くように、出版の地域性を色濃く反映していることが注意されるべきであろう。このコレクションに佛山や広州の書坊のものが多く残されているのも目立つが、考えてみれば当たり前のことで、俗書は概ね消費地の付近で出版されたと考えられ、『花箋記』が欧州により多く所蔵されるように広州から海外へもたらされたものが数多くあっただろうことに不思議は無い。そしてそれは日本へもたらされたものとは異なる母集団の中から買い取られて欧州に渡っていったものである。従って、江南や福建のものだけで出版文化を論ずると全般的な視点を喪う可能性があることは心すべきであろう。その意味では、乾隆になれば「呉王」という記載は見当たらなくなるのだが、康熙末の『萬寶全書』巻一地輿紀には「呉王新開四郡名」という呉三桂が貴州に設置した四府に関する記載がそのまま残されていること、また『歴代帝王圖像』鈔本（E5）には南明の弘光・隆武・肇慶（永暦とはしていない点にも注意される）の諸帝の像が順治帝の肖像の前に置かれていることなどは、時代の特徴と理解すべきなのか、それとも南方の書物の独自性の現れとして考えるべきなのだろうか。書禁というものを考える際にも地域性の視点は必要となってくるだろう。

遠東図書館の王立図書館寄託の漢籍は点数もさほど多くなく、好事家的関心からいえば取り立ててみるべきものもないということになるかもしれないが、出版文化の面からみれば、嘗ての広州や香港にあったごく普通の書店の棚を反映するものであり、海外に持ち運ぶのに際し大部なものを買わないあるいは買えないというのも、庶民的な書物の置かれた条件と似かよっている。その点で士大夫の蔵書で書賈が持参して売りに来るのとは随分異なり、別の階層の知識・教養を窺わせるものといえないだろうか。その点では女性向けとしか思われない女紅の書物が現存している点などは世界的にも稀な例であろう。王室が図版を収めるものを収集しようとしたとはいえ、他には稀な女紅の書がストックホルムに二点存在しているということは、実際には中国内で出版され店頭で売買された量も少なくないことを推測させる。

翻って、明末に数多く出版された評価もまだ定まらない同時代の個人文集などは商品としてどれだけ書店の店頭に並んでいたのだろうか。書帕本という特殊な贈答品はどれだけ普通の人の目に触れるものだったのだろうか。商業出版の発展として語られる例もほとんどが小説や科挙の受験参考書、医書などの実用書である。そして、王立図書館の漢籍コレクションで多くを占めるのも同様のものである。ちなみに、日本ではノルデンショルド・コレクションにみる限り漢籍の文集は存在せず、貸本屋や普通の書店といった一般の商業ルートに載せられたものはなかったと思われる。江南との文化的背景の地域差が書店の店頭に現れるものなのかどうかは考慮する必要はあろうが、その時代の文化全般を論じるにはごく身近に売買された普通のものを無視するわけにはいかないだろう。文化的な優品ではなくごく一般的なものであるからこそ海外への取引に扱われたわけであり、そこにはある意味でなお未だ探りがたい当時の実相を反映するものがあるのではないだろうか。

〔附記〕　本稿は簡単な紹介の文章ではあるが、機会があればきちんとした形での漢籍目録を作成できれば幸いである。ストックホルムでの調査研究は諸先生の暖かいご協力を得てこそ可能であった。東洋博物館館長の Magnus Fiskesjö マグヌス・フィスケショー博士には面識も無い日本の一研究者を快く受け入れ

ていただいた。また、遠東図書館館長のラルス・フレデリクソン（馮遼）氏からはストリンドベリィ作成の目録を見せていただいた。そして、滞在中最も手を煩わせたであろう靳玉英女士には、少なからぬ書物を毎回二階の収蔵庫から閲覧室まで、多忙な中にもかかわらず労を厭わずに出し入れしていただきいつも様々な便宜をはかってもらった。さらに、ストックホルム大学日本学科の木村浩子先生、Mats Karlsson マッツ・カールソン先生をはじめとするストックホルム滞在中様々な点でお世話になった方々の名も挙げなければならない。そして、この短い紹介が御世話になった東洋博物館へのささやかな返礼となればこの上ない悦びである。（2003.11.30）

注

1） Sören Edgren, *Catalogue of the Nordenskiöld Collection of Japanese Books in the Royal Library*, 1980

2） 『ヴェガ号航海誌』（小川たかし訳、フジ出版社、1988）

3） Urban Wrakberg and Gunnila Lindberg-Wada, eds., *An Arctic Passage to the Far East: The Visit of the Swedish Vega Expedition to Meiji Japan in 1879,* Stockholm: The Royal Swedish Academy of Sciences, 2002.

4） *The Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* No.58, Stockholm 1986.

5） ストリンドベリィ作成の *Catalogue de Livres et de Manuscrits Chinois* と題された目録の稿本が王立図書館にあり、王立図書館とイェテボリ博物館に所蔵される漢籍を著録している。またウプサラ大学図書館所蔵漢籍の目録は別に作成され『漢書房』と漢字で記されて 1878 の年記がある。以下、本稿で（Strindberg 15）などというのは、このストリンドベリィの漢籍目録の王立図書館の部の番号である。なおこれらの目録は、図書館長の Lars Fredriksson ラルス・フレデリクソン（馮遼）氏からそのコピーを借閲することができた。記して深謝する。

6） Jan Wirgin, *Fråm Kina till Europa,* Östasiatiska Museet Stockholm, 1998. 関係部分を武富由美子氏に翻訳していただいた。記して深謝する。

7） Gunnila Lindberg-Wada, “Reflections on the Nordenskiöld Collection of

Japanese Books in the Royal Library in Stockholm", *An Arctic Passage to the Far East:The Visit of the Swedish Vega Expedition to Meiji Japan in 1879. p89*

8） 封面題を「仁貴征西説唐三伝」Rengui zhengxi Shuo Tang sanzhuan といい、封面に「進文堂板」とある。

9） 中には精選山歌初集（XXIV）粤海関洋船牌（XXV）のようなものも記されているが現在は所在不明。

10）Torbjörn Lodén, "Towards a History of Swedish China Studies", *Out-stretched Leaves on his Banboo Staff,* Stockholm: The Association of Oriental Studies, 1994. p10

11）『清史稿』巻七十五、地理志、貴州、
康熙三年、増置黔西・平遠・大定・咸寧四府。二十二年大定・平遠・黔西降州、隷咸寧府。

12）Walter Fuchs, *Chinesische und Mandjurische Handschriften und Seltene Drucke;nebst einer Standortliste der sonstigen Mandjurica,* Verzeichnis der Orientlischen Handschriften in Deutschland Band XII, Wiesbaden, Steiner, 1966. p82

13）坂出祥伸『パリ国立図書館所蔵漢籍解題目録』（東京、霞ケ関出版、1993−1994）復刻 Maurice; Courant, *Catalogue des livres chinois, coreens, japonais, etc.* （Paris, 1902）

14）他にも同じ「増補幼学須知雑字大全」という題をもつものがワイマール（Fuchs Nr.142 p78）に所蔵される。

15）『四庫全書總目』巻 177、集部、別集類存目四、念初堂稾四巻續集二巻
明陳嘉謨撰。嘉謨、廬陵人。嘉靖丁未進士、官至四川按察司副使、隆慶庚午移疾歸、召為湖廣布政司左参政、不起、優游林下以終。

16）謝水順・李珽『福建古代刻書』（福建人民出版社、1997）277 頁。なお、天啓五年進士の劉孔敬は劉孔敦の兄弟ではないかと思われる。

17）楊繩信『中国版刻綜録』（陝西人民出版社、1987）によれば、帯月楼には康熙末から乾隆間の刊本が存する（333 頁）。

18）王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、1983）子部、医家類、258 頁。

19）『四庫全書総目』巻七十、史部、地理類三。

20）李堂増刊乾隆『湖州府志』巻二十七、郡守表に、

陳一夔、字瞿石、福建侯官人、廕生。康熙三十一年任。

とあり、当時湖州府知府として在任。また、鄭元慶と陳一夔との関係については、同『湖州府志』巻二十三、人物、国朝の鄭元慶の伝（23b）に詳しい。陳一夔の父は陳丹赤といい、順治辛卯の挙人、浙江の分巡温處道権按察使の任にあった時に耿精忠の反乱に遭い温州を守備して死んだ（『同治重纂福建通志』巻二百四十、人物、国朝忠節伝 2a）。

21）大谷敏夫『清代政治思想と阿片戦争』（同朋舎出版、1995）第四章、阿片戦争後の経世学と歴史地理学、第二節、「海国図志と瀛環志略」。

22）河合道臣「仁壽山荘」の蔵書印に関して高津孝氏よりご教示いただいた、記して深謝する。

23）なお、幕末邦訳聖書集成（ゆまに書房、1999）13～16 に 1813 年刊の立教大学附属図書館所蔵本を底本とするモリソン訳『新遺詔書』が収められている。

24）Oslo University:older Chinese books（http://www.staff.hum.ku.dk/dbwagner/Oslo/OsloCat.html）

25）千葉謙悟「中国語における外国語国名表記の固定と変化」（『或問』第 5 号，2003）。

26）『華英通語』の翻訳出版は『福翁自伝』「ヨーロッパ各国に行く」冒頭に述べられており、慶応義塾編『福沢諭吉全集』第一巻（岩波書店、1958）に収められる。

27）平井一弘「福沢諭吉『増訂華英通語』とハーバード版『華英通語』」（『大妻比較文化』3、2002）。

28）高田時雄編『東洋学の系譜』（大修館書店、1996）。

29）蘇精『馬禮遜與中文印刷出版』（台湾学生書局、2000）。

30）Boris Riftin 李福清「早期的中国年画収蔵及年画解釈（V.M.Alexeev 年画収蔵及其研究）」『第 3 回中国民間版画国際シンポジウム論文集』（日本民藝館、1999）25 頁。

王立図書館　Kungliga Biblioteket
王立図書館所蔵の漢籍は 1986 年に遠東図書館に寄託されて現在に至っている。

東洋博物館　Östasiatiska Museet
東洋博物館は英語で the Museum of Far Eastern Antiquities といわれ東洋考古博物館などの訳が当てられることもあるが、スウェーデン語では単に東アジア博物館となる。

Drottningholms slott library
写真はドロットニングホルム宮殿図書室を説明したパンフレット。1760 年に図書室に改装された。ロヴィーサ・ウルリカのコレクションは現在王立図書館に移されている。

ドロットニングホルム宮殿　Drottningholms slott
ストックホルム郊外の島に立てられた北のベルサイユとも呼ばれるバロック様式の宮殿で、ユネスコ世界遺産にも登録されている。

Skeppsholmen　遠景
Skeppsholmen には橋が通じている。左に見えるのが東洋博物館、右手の丸い屋根は教会で、その裏手に遠東図書館の入口がある。

Skeppsholmsbron の橋から王宮を望む

The Royal Library Collection of Chinese Books in the Museum of Far Eastern Antiquities in Stockholm

OSAWA Akihiro

The Museum of Far Eastern Antiquities has a collection of Chinese old books. Originally it derives from the collection of the Swedish royal family from in the 18th century. But until now, it has been left almost unknown. In this collection there are some books of art and natural history which are bound in leather. Then here are about one hundred books classified with category signs from A to K. These are the old Chinese books from before the 1870s, stitched with string. Most of them are printed by woodblock. Furthermore there are about ninety books, which are given the category sign M. Most of them concern Christianity and primary education, printed by typography. About fifty books are given the sign "Litt.Kines". Many of these are books of the period of the Republic of China, and some are extracts of European Chinese studies.

This collection has a few Ming 明 editions, but most of the Chinese old books are late Qing 清 editions, especially the books of the 19th century. In this collection the proportion of popular publications to the whole is comparatively great. Especially, two books of embroidery designs compiled for women are worthy of note, as these are very rare examples of this kind. Many of the books were printed in Guangzhou 廣州 or Foshan 佛山 and exported from Guangzhou or Hong Kong 香港. It is probable that foreign merchants bought books that were easy to get, in other words, it is recognized that this collection reflects conditions in the ordinary bookstores of Guangdong 廣東 province.